

アスパラガスの数え方 — 英文法を考える(一)可算名詞と不可算名詞

清水 啓 子 (英語学・言語学)

バークレイ・エピソード (1)

2003年9月から2004年9月まで筆者はアメリカ、カリフォルニア大学バークレイ校の言語学科に客員研究員として在籍し、認知言語学という分野で研究生生活を送った。カリフォルニア州は映画のハリウッドだけでなく農業も盛んで、知事になった映画俳優のシュワルツネッガーは映画のプロモーションのためではなく、農産物の輸出促進のために日本を訪れたこともある。バークレイ滞在中によく買い物をしたスーパーにはカリフォルニア産のトマトだとかブロッコリーだとかアーティチョークだとかがいつも山のように積まれていた。

茹でればいいだけなので毎日のようによくグリーン・アスパラガスを食べた。それでふと疑問になった。一体英語ではアスパラガスはどうやって数えるのか。バークレイ校で友人になったインド系の文学部学生 Angie に尋ねてみた。

“Do you like asparagus?”

“Yeah, I like it. And you? Do you eat it in Japan?”

“Yes, I like it, too. Um, how much do you eat?”

“I eat it a lot.”

なかなかこちらの知りたい答えが返って来ないので、単刀直入に聞いた。

“I wanted to know how you count asparagus.”

“...well, I would say... ‘stem’ ...like ‘4 stems of asparagus’.”

彼女の答えは ~ stems of asparagus。しかしながら、何故そんなことを尋ねるのかと逆に聞かれ、日本語ではアスパラガスも鉛筆と同じように単純に1本、2本と数える、英語には pencils というような複数名詞になる可算名詞 (countable nouns) がある一方、asparagus のように複数形 (*asparaguses¹) にならない不可算名詞 (uncountable nouns) があって日本人には非常に理解しがたい、一体英語話者は目が悪いのか、それとも数が数えられないのか、アスパラガスなんて見れば何本あるか誰だってすぐわかるではないか、とかなり差別的な発言をしたところ、

でも、ホウレン草 (spinach) と同じでしょ、1枚1枚数えないし、という返事が返ってきた。確かにいくら日本人でも「今日はほうれん草を5枚食べた」とは言わない。なるほどアスパラガスもホウレン草も緑色の野菜ではある、しかし形態的にかなり違うんじゃないのかと反論すると、彼女いわく、じゃレタス (lettuce) は？あれも1枚1枚数えないでしょ。言われてみれば確かに「今日はレタスを5枚食べた」とも言わないし、かといって丸々「1個」全部食べる人はあまりいない²。日本語でも「今日はサラダにレタスを食べた」と言うだけで、その数量にはあえて言及しない。英語や日本語の「数」とはどういう言語システムなのだろうか。

言語学的考察 その1：「カテゴリー化」

一般に「カテゴリー化」とは、「知識に秩序を与える」働きを持つ。カテゴリー化はさまざまな事物や出来事、経験に有為な仕切りをつけることである。

我々の身の回りに起こる様々な現象は一回一回ごとに千差万別で、それぞれの現象に別々の名前をつけていたら言葉はいくつあっても足りず、言語によって表わされる知識は何の体系性も持たなくなってしまう。我々人間、そしておそらく生命体のすべては、自己の生存に関わりのある情報を、自己の生存に有意義となる仕方で分類し、その区別によって外部世界の環境に対処している。この事実とはどんな原始的生物にも当てはまる。それは、生物それぞれに備わっている限られた情報処理能力を生存のために最大限有効に使う、という生得的な仕組みである。逆にいえば、生存にとってより有利な情報処理能力を備えた個体が、外界の選択圧の中を生き抜き、種を存続させてきたということになる。

もっと身近な人間の日常行為の観点から言えば、カテゴリー化とは、物事のある部分的な特徴や共通性に注目してまとまったグループを作り、他の物事と区別しようとする意識の働きである。ここで言う「カテゴリー化」とはいわゆる「分類」とほぼ同義とみることもできるが、しかしながら科学者にしか理解できない専門的な科学的分類カテゴリー (scientific categories) のことではなく、一般的な人々の日常の認知様式に基づいた分類カテゴリー (cognitive categories) を指している。前者の科学的カテゴリーにおいては、その専門分野の学問的知識に則った客観的、絶対的基準によって物事は「A」(Aである)あるいは「 $\neg A$ 」(Aではない)のどちらかに二項対立的に分類される。ある昆虫は「カブトムシである」か「カブトムシでない」かのどちらかである。これは社会学的に定められた法律の場合もあてはま

る。ある一人の人間は「日本国籍を持つ」か「日本国籍を持たない」かのどちらかに分類され、それによって諸々の権利や義務が生じることになる。「A」でもありかつ「 $\neg A$ 」でもあるといった八方美人的存在はなく、さらに「A」カテゴリー内のメンバーはみな平等にAであり、等価値である。どれかが「より良いA」であったり「あまり良くないA」であったりはしない。一方、後者の認知カテゴリーはこれとは異なり、外部世界と、それを主体的に認知しその中であるいはそれに対峙して行動する人間との、相互的、積極的な関わり合いの中から生じてくるカテゴリー構造であると言える。主体である人間の積極的な世界の解釈であり、その瞬間を生きている人間にとっての現実世界のあり方を反映している。

卑近な例をあげると、「タマネギ」といえば、「ユリ科ネギ属の多年生作物」という植物学的分類にもとづいた定義があり、これは科学的なカテゴリーである。しかし一般の人々にとっては、「野菜の一種で、ふつう薄茶色で、拳くらいの大きさの球形で、よくカレーや酢豚に入っていて、切るとなぜか涙目になる」といった知識のほうが実際の経験に基づいてリアリティがある。この種の経験に根ざした知識が「認知カテゴリー」といえる。また、ある物事に対し個人が持つ百科事典的知識³が、その物事を指す「言葉」の意味内容である。

このように二通りのカテゴリー化が存在することは、科学的分類（客観主義的カテゴリー）と民間分類（経験主義的カテゴリー）の不一致に裏付けられよう。たとえば「クジラ」は前者に従えば哺乳類であるが、後者に従えば魚の仲間と考えられなくもない。「ペンギン」は鳥類であるけれども、往々にしてアザラシやオットセイと一緒に水族館にすることが多いので哺乳類のようにも見え、おそらく4歳児にペンギンはスズメと同じトリなのだといくら力説しても時間の無駄であろう。また「コウモリ」も哺乳類ではあるが、生物学的知識を持ち合わせず空を飛ぶことばかりに目がいけば、トリと見做してしまう可能性もあり、現に日本語では「蚊食鳥」というコウモリの別称も存在する。また経験主義的カテゴリーに従うならば、文化習慣の違いによって同じ物が異なるカテゴリーに入れられることも当然あり得る。例えば「トウモロコシ」は日本人やアメリカ人にとっては、ジャガイモやグリーンピースと一緒に野菜の仲間と考えられるが、これが東南アジアのタイでは果物に分類される。タイでカキ氷を食べたことがあれば納得できようが、カキ氷の中に甘いアズキと一緒に粒状トウモロコシが入って出てくる。

人間の自然言語（コンピュータの計算言語とは違う）は、こうした人間の主体的

経験にもとづいて形成される認知カテゴリーを反映している。言語が認知カテゴリーあるいは認知パターンの反映であるとする、では先の「アスパラガス問題」はどの様に説明できるのだろうか。英語の *asparagus* という名詞は単数複数の区別がなく、あえて数えたい時には *piece / stalk / stem* といった単位を表わす言葉を使い、*10 pieces / stalks / stems of asparagus* のように表現する。そもそも英語の名詞には単数形と複数形の区別がある名詞（可算名詞、たとえば *cat(s)*, *desk(s)*, *book(s)*）と、その区別がない名詞（不可算名詞、たとえば *water*, *butter*, *wood*）の2種類があるという言語的事実は、一体どのような認知パターンの反映なのだろうか。この問題を理解するためには、経験基盤主義に基づく認知カテゴリーの特徴である「プロトタイプカテゴリー」構造という考え方をわかっている必要がある。

言語的考察 その2：「プロトタイプカテゴリー」

プロトタイプカテゴリーについての研究の先駆はアメリカの心理学者ロッシュである。彼女は、人間がカテゴリー化をする場合、他とどう違うかという境界線が重要なのではなく、中心的事例つまり典型（プロトタイプ）を拠り所にしてそれとの程度似ているかに基づいて判断しているのではないかと仮説を立て実験をし、実際に人間の判断が「プロトタイプ構造」をなしていることを証明した。ロッシュによれば、カテゴリー概念の形成は、そのカテゴリーに含まれるメンバーのリストによるのでもなく、カテゴリーに入るための必要十分条件のリストによるのでもなく、典型的なカテゴリーメンバーつまりプロトタイプに基づいている、ということになる。ロッシュの実験では、たとえば「トリ (*bird*)」カテゴリーの場合、アメリカ人にとってはコマドリ (*robin*) がもっとも良いトリの事例と判断され、ペンギンやダチョウやペリカンはあまり良くない事例と判断される。自然界の動植物ではない人工物のカテゴリーでも同様で、たとえば「家具 (*furniture*)」カテゴリーでは、椅子やテーブルが良い事例で、テレビや灰皿は良くない事例となる。このプロトタイプに関する知識は個人の経験を通して形成されるので、日本人にとっては「トリ」の典型的事例はスズメである（人によってはカラスかもしれない）。ふだん人は日常的にある物Xを何だと判断する際、その特徴（トリの場合は、羽がある、くちばしがある、飛ぶ、卵を生む、二本足、など）を一つ一つ数え上げているのではなく、典型的事例であるプロトタイプに照らし合わせて判断しているのである。ある朝見かけた名前の知らない生物を「トリ」の仲間とするかどうかはその全体的な印象が

プロトタイプ（例えばスズメのような鳥）とどれほど似ているかに拠っている。ちなみに筆者は鳥の名前に疎いので、どんな鳥を見たかを説明する際は「スズメみたいな鳥で白いの」とか「カラスとスズメの中間ぐらいの大きさで茶色っぽい」というように名前を知っている数少ない鳥と比べることで表現する。つまり語彙力のない子供と同じ手を使う。しかしこれはプロトタイプカテゴリーに基づいた人間の認知メカニズムをそのままに言語化しているのである。たとえ「ハクセキレイ」などとトリの種類を言えなくともカテゴリー化はできている。私たち人間は典型的な「Xらしさ」にもとづいて「Xのようなもの」として日常的な事物についてのカテゴリー概念を形成しているのであり、こうして作られた概念はプロトタイプカテゴリー構造をしている。

言語的考察 その3：「英語名詞の可算・不可算」

人間が自然に行なうカテゴリー化は中心的典型にもとづくプロトタイプカテゴリー構造をしている、という考え方を英語の名詞カテゴリーの問題に当てはめてみよう。英語には単数複数区別のある「可算名詞」とその区別を単語の形として持たない「不可算名詞」の2種類がある。このそれぞれ2つのカテゴリーのプロトタイプは何か、という心理学的実験を行った先行研究を筆者は知らない。仕方がないので数冊の文法書などを見てみると、可算名詞では、books, eggs, horses (LDOCE), leaves, cups, footballers (CGE)、不可算名詞では、butter, music, advice (LDOCE), cheese, music, sand, water (CGE)、その他 luggage, money, furniture などが例としてあげられている。

この2つの名詞カテゴリーが持つ特徴を分析すると、以下のようになる。

可算名詞 (book, cat)	不可算名詞 (water, butter)
<ul style="list-style-type: none"> ● それ自体が一つの単位をなす個体 ● 物としての境界が明確 (bounded) ● 形がある ● 異なる部分・部品から成る ● 数えやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ● それ自体が一つの単位をなさない物質 ● 物としての境界が不明確 (unbounded) ● 形がない ● どこを取っても同じ (homogenous) ● 数えにくい ● 数量を言うためには言語的な工夫が必要

可算・不可算のどちらにしても、典型的事例に近いものを判断するのは容易である。chair, spoon, key, carなどはそれぞれ形が明確で境界もはっきりしているから可算名詞。oil, wine, cheeseは典型的不可算名詞のwaterやbutterと似ているからおそらく不可算名詞、と判断は順調に進む。しかし典型例からかなり逸脱する事例はどうカテゴリー化したらよいのかと日本人は迷ってしまう。たとえば、sand, sugar, rice, pea, coffee beanと並べれば、その粒子は段々と大きくなるけれども、英語ではどれを可算名詞で表わすのだろうか。粒子の直径が6ミリを超えた場合から可算名詞になる、というような絶対的基準があるわけではない。正解はriceまでは不可算でpeaからは可算名詞扱い。しかし、この可算／不可算を分ける境界線こそ、「英語」という言語が慣習的に、幾分かは恣意的に決めているのである⁴。英語ではsand, sugar, riceは不可算名詞で表わされ、物質的な概念化で押し切り、waterやoilの仲間とみなす。もちろんriceもちゃんと見れば粒々が見えるし数えられる。sugarもかなり目を凝らせば粒子が見える。しかし、こうした物理的、客観的事実は不可算の物質名詞rice, sugarで表現されることで背景化されてしまい、粒々の複数であるという情報は言語化されない⁵。一方、pea(s), coffee bean(s)は複数形があり、cat(s)やbook(s)と同じように可算名詞に分類される。しかし、a cat, a bookという表現が日常生活でよく遭遇するごく普通の状況を指すのに対し、a pea, a coffee beanといった単数表現が必要になる状況は日常的にさほど発生しない(コーヒー豆の一粒が問題になる状況を思いつくのは難しい)⁶。この事実は、やはりpea(s)やcoffee bean(s)が可算名詞といえどもそのプロトタイプメンバー(cat(s)/book(s))とは若干異なる性質を持つことを示している。もっと良い例は、oats(カラスムギ)である。oatsはいつも複数形でしか現れずan oatとは言わない。一粒のカラス麦を云々する状況が考えにくいからであろう。つまり、その物体を人間がどのように扱うか、その対象と人間がどのように関わるか(砂糖はスプーンですくい、コーヒー豆はおそらく一粒一粒収穫し、飲むときには粉状に挽く、など)が英語名詞の二つの文法的カテゴリー決定に大きく関与しているのである。また、sandやriceは不可算、pea(s)からは可算という境界設定は、英語という言語の慣習でもある。この英語特異の言語文化的線引きが英語母語話者でない日本人にとってあまり釈然とせず、かなり恣意的なカテゴリー化に感じられてしまうのは、名詞に数概念が含まれていない日本語を母語とする私達にとっては当然である。つまり、英語名詞の可算・不可算の区別はプロトタイプに基づいた根拠あるカテゴ

リー化なのではあるが、中間的は事例をどうするかというと、rice 対 oats といった境界線部分を考えて見れば明らかな様に、日本人のような英語非母語話者から見るとかなり無理矢理なところがあるのだ。この無理矢理感は、日本語を外国語として学んでいる学習者が「自動車一台」と「スポンジケーキ一台」（お菓子作りの際の数え方）という数え方に遭遇し、なぜ自動車とスポンジケーキが一緒の仲間になるのだらうと疑問に思うのと似ているかもしれない。

アスパラガスに戻る。rice は不可算名詞で coffee bean(s) は可算名詞という区別については、指示対象が粒状であってもその対象を人がどの様に扱うかが重要であるという点で納得がゆくが、asparagus は粒状ではないし coffee beans にくらべてかなり嵩（かさ）がある。どうもアスパラガスの場合は、可算・不可算それぞれの典型事例である cat(s) と water のどちらに似ているかという問題でカテゴリー化されているのではないようである。ここでバークレイの友人 Angie の返事「ホウレン草 (spinach) に似ている」に注目するべきであろう。ホウレン草はどう数えるか。葉っぱとしてみれば leaves と数えられるはずなのであるが、根の部分では葉が数枚つながって株になっている。一般的にホウレン草は茹でたり炒めたりして食べる。茹でたり炒めたホウレン草は、もはや葉っぱの状態をとどめない。したがって1枚2枚と数えない。生でサラダで食べるにしても適当にちぎってしまうので、断片を1枚2枚と数えてもあまり意味がない。つまりホウレン草は「数えにくい」し、いろいろ異なる調理場面で一様に役立つような意味のある数え方が一定していない。Google 検索をしてみると、一番多いのは a bunch of spinach、茹でた缶詰なら a can of spinach、最近のアメリカのスーパーでは食べるばかりにきれいに洗ってビニール袋に入ったものもありこれは a bag of spinach となる。日本語でもホウレン草は「1把、2把」と束で数える。ホウレン草が car(s) や book(s) と異なり何となく数えにくいことは日本人でも想像できる。この様な、典型的不可算名詞 water とはまた別の観点からの「数えにくさ」ゆえにホウレン草は不可算名詞なのである。ちなみに spinach leaves という可算表現もできるが、この場合は葉の一枚一枚の可算性が前景化されている。

再度アスパラガスに戻ろう。アスパラガスは当然野菜に分類されるが、野菜であればすべて可算名詞になるかという問題ではない。英語話者は野菜カテゴリーの各メンバーに対しても可算・不可算という観点からのカテゴリー化をしている。大き

く分けると、carrot(s) や tomato(es) のように可算名詞のもの、wheat や corn のように穀物で不可算扱いのもの、さらに spinach のように葉状のもので数えにくく不可算扱いのものがある。そしてアスパラガスは、おそらく英語母語話者にとってこのハウレン草という「野菜カテゴリーの中での際立ったサブ・プロトタイプ」に似ている同じ仲間としてカテゴリー化され、従って同じように不可算名詞として扱われるのだろう。決して「asparagus は water や butter と一緒の仲間」という動機付けに基づいて英語の asparagus が不可算名詞になっている訳ではないのだろう。つまり可算・不可算のカテゴリー化はその典型例 (cat(s) 対 water) が二極間 (個体 vs 物質) だけで競合してカテゴリー化を決めているのではなく、不可算カテゴリーの中にもいくつかの下位カテゴリー (クラスター) があり、その下位カテゴリーそれぞれにプロトタイプがあるのではないかと想定できる。water や butter のように液体あるいは固形でどこをとっても同質タイプ (homogeneous) という不可算名詞プロトタイプ①と、spinach の類で、それぞれの葉っぱは一枚一枚分かれて存在し、数えようと思えば数えられるがその数え方が人間の日常生活にとってあまり有益ではないという不可算名詞プロトタイプ②がありそうだ。Angie にとってはこのグループ②のプロトタイプの野菜がハウレン草で、彼女の頭のなかでは、アスパラガスは「ハウレン草みたいなもの」として存在するのだろう。この時、アスパラガスが棒状で、形態的にはどちらかというニンジンに近いのではないか、という情報は背景化される。他にも lettuce, broccoli, celery などがこのグループに当てはまるが、しかしこのクラスターの中でどれがプロトタイプ事例かという問題は個人の経験により異なるのだろう。プロトタイプカテゴリーとはプラトン流のアイデアとは違って、個人的経験や学習によって形成される動的な経験主義的カテゴリーなのである。

不可算名詞カテゴリーの①と②にも連続性を認めることができる。①の典型例が water として、②の典型例がとりあえず spinach としておくと、water の液体状が微粒子状になれば sugar や sand という不可算名詞につながる。一方②の spinach の葉っぱ状態がもう少し小さくなり乾燥すれば tea となり、紅茶のサラサラ感は不可算名詞 sugar の粒子状態にかなり近い。あるいは茹でて缶詰に詰まったハウレン草を想像すれば cream や butter といった不可算名詞にかなり接近する。つまり不可算名詞の下位グループ①と②はそれぞれ別個に独立しているのではなく連続したネットワーク関係にあるのだ。

英語においてこうした不可算名詞の指示対象物を数えたいときには、それぞれの

目的・状況に合った数え方をする。たとえば、a spoonful of sugar, 2 pounds of butter, 3 gallons of water など。アスパラガスの場合は、5 stems / pieces / stalks of asparagus、あるいはホウレン草のように a bunch (一束) を単位にして、2 bunches of asparagus などという表現も Google 検索で見つかる (a bunch of asparagus はおおよそ何本なのかという疑問は残る)。こうした数え方は対象の形状および人がそれをどう扱うかに深く関係していて、日本語の「～本」「～皿」といった類別詞カテゴリーと共通する要因がある。

バークレイ・エピソード (2)

バークレイで筆者の話相手になってもらっていた Jane は YWCA でボランティアの英語クラスをオーガナイズしていた。すでに引退したご主人は国連職員だったそうで何か国かの海外駐在経験があり、Jane 自身は海外での英語教育の経験を持つ。かなり高齢でおまけに目が悪いというのにコンピュータも携帯電話も難なく使いこなす。ある日、

“I’ve got a lot of e-mails these days” というので、言語学者の性 (さが) としか言いようのない重箱の隅をつつくような好奇心を払拭できずに尋ねた。

“Why is it that in English ‘mail’ is an uncountable noun but ‘e-mail’ is countable?”

“Because an ‘e-mail’ is like a ‘letter’ but if you say ‘mail’, there are different kinds of things, like letters, postcards, packages...”

さすが英語母語話者、直感的に mail (不可算名詞) と e-mail(s) (可算名詞) の違いがわかっていた。

言語学的考察 その4: 「集合名詞という不可算名詞」

不可算名詞には前述した物質名詞 (water タイプ) のほかにもう一種類、集合名詞という下位グループがあり、例えば mail, furniture, equipment, cutlery (silverware) などがある。これらの名詞はひとつをあらわす冠詞 (a～) を付けたら、複数形 (~s) にすることはできない (*a furniture, *furnitures)。

先のプロトタイプカテゴリーに関するロッシュの研究では、自然カテゴリー「トリ」だけでなく人工物カテゴリー「家具」についても実験が行われ、どちらのカテゴリーも人間の頭の中では、典型を中心とするプロトタイプカテゴリー構造をして

いることが判明した。ではなぜ英語では a bird / three birds と言えるのに、*a furniture / *three furnitures と言えないのだろうか。実は furniture の場合も、単純に言えば water や spinach の場合と同様に、「数えにくい」のだ。が、その数えにくさの性質が先の water や spinach と違っている。

まず「数える」ということをする際に私たち人間がしていることを確認してみる。たとえば次のように図形が並んでいたら、どの様に言うだろうか。

(1) △△△△△△△

おそらく「三角(△)が7つ」が正解だろう。

しかし、つぎのように図形が並んでいたら、どう言うのだろうか。

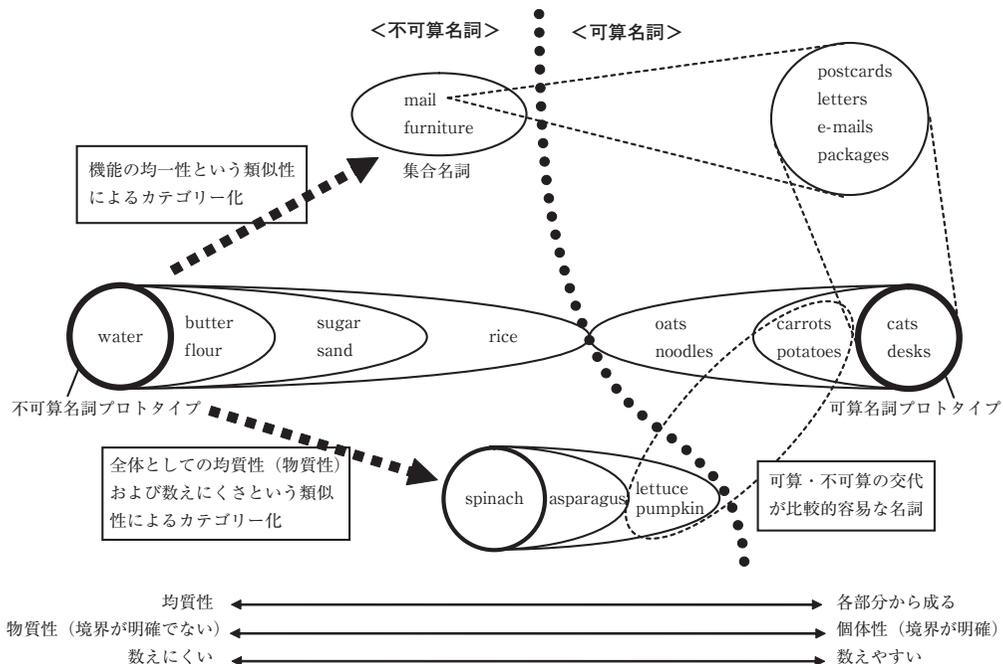
(2) △★★★◎◎§*◇◇■※☆

簡単に一言では言いにくい。(1)と(2)の違いは、(1)では同じものが複数あるのに対し、(2)ではそれぞれ何となくタイプは似ているけれど異種の形のものが集まっているのである。これをまとめて「図形が13個ある」と言い切るにはある種の意識的な飛躍が必要になる。異種のもを同じレベルに並べて全部でいくつとは「数えにくい」のである。たとえば「部屋の中に物がいくつありますか」と質問されて、真剣に考えれば、机がひとつ、椅子が3脚、コンピュータが1台、本が100冊、服が15着、靴が9足、カーテン4枚、エアコン1台、エアコンのリモコン1つ、その中になら電池も2つ入っているし、鍵が付いたキーホルダーが2つ、いやしかしこれは鍵がいくつかを言うべきか、というように単純に「全部で物がいくつありますか」と答えるのは無理があり、そもそもはじめの質問のし方が悪い。

英語の furniture にもこの感覚が当てはまる。ロッシュの研究では、アメリカの大学生が典型的な furniture と判断するのは、椅子、ソファ、テーブル、ドレッサー、ロッカー、机、ベッド、引き出し、本棚などである。たとえば椅子が4脚、テーブル1つ、ロッカー1つ、ベッド1つ、電気スタンド1つ、クッション3つを全部あわせて、「家具11個」と数えなければならない必要性が日常生活でいつ発生するだろうか。物を数えるという行為が有意義なのは、同じような物を集めてグループにするだけでなく、それらを並列関係において5つなり6つなりと複数の存在を数える意義や必要性が有るからだ。並列に並べられるという関係性の一つには、同じような機能を持っているということもある。椅子が4脚あれば4人が座れる。ベッドが4つあれば4人が寝られる。ベッドと椅子が合わせて全部で4つあっても、何人の人にどんなことができるのかはすぐにはわからない。あえて探せば、家具屋

での買い物の後に受け取ったレシートに「お買い上げ 合計4点」という表記を見つけた可能性もあるが、これは「売買」という特殊な場面での購入した品数という数え方である。英語の mail も同様で、mail で表される物の中には封書やはがきや小包や雑誌やらと色々な種類で大きさもバラバラのものが含まれる。したがって全部でいくつとは数えにくい。letter ばかり同じ種類なら3通4通と数えることに抵抗はない。一方、新語 e-mail は、「letter のようなもの」といった類似性による可算名詞への仲間分けなのだ。e-mail は長さにこそ差はあれ送られ方や形式はどれも似たりよったり一様である。mail のようなタイプの不可算名詞カテゴリーには、他に clothing, equipment, cutlery などがあるが、これらもその中に含まれる物の雑多なことを思えばなぜ単純に複数形にならないのかが理解されよう。スプーン2本とフォーク3本とナイフ1本を合わせてカトラリー6本と言ってもあまり意味がない。集合名詞とは、ある場面・状況での概略的な機能・目的を果たす諸々の物をまとめて言う、という概念化から成立していて、その中に含まれる個々の異種メンバーを並列にならべて数え上げるのは難しくかつ有意義ではない、という特殊な不可算名詞カテゴリーなのである。また、「地震の時に非常持ち出しする物」のように、語彙的なカテゴリー名称が存在しなくても、集合名詞と同じ要因でその場限りのカテゴリーを作り出すことはよくある。

いままで見てきた可算名詞と不可算名詞のプロトタイプ構造の関係は以下のよう



に図示できるが、これは一つのモデルにすぎない。カテゴリー概念とは個人の経験に基づき形成され、かつ新たな経験により日々刷新されてゆく動的なものである。したがって、たとえ英語母語話者であろうと究極的には一人ひとりが微妙に異なる概念構造を形成しているのだらうと推測される。

バークレイ・エピソード（3）

大学付近に借りていたアパートで、廊下を隔てた部屋に John という法科大学院の院生が住んでいて、ある日筆者の部屋のドアをたたいてきて、いきなり、“Do you have フラワー？”と聞いてきた。

“Do I have what?”と聞き返すと、

“I’m making chocolate-chip cookies, but I don’t have any フラワー so if you have ...”

と、ここまで聞いて納得した。John の欲しがっていた「フラワー」は flower（花）（可算名詞）ではなく flour（小麦粉）（不可算名詞）だった。どちらにせよ持ち合わせていなかった。その後 John はどこかよそで小麦粉を調達したらしく、後で手のひらサイズのチョコチップクッキーを2枚、筆者にもおすそ分けしてくれた。

おわりに

ことばで表現するとは、その瞬間に話者の頭の中に既に存在する言語手段（意味を伴った音）を使うということである。であるから、言語とは有限のシステムである。有限といっても、生まれてから死ぬまで一個人の知識は変化し続け、社会的な構造物である言語も変化し続けるので、言語システムは不動で固定している、ということの意味してはならない。そうではなくて、いわばその時その時の手持ちの札は限られている、といったニュアンスだ。しかし人間は、今現在という瞬間で切り取れば有限である言語システムを使用して、他方、外部世界という変化極まりなく流動的で無限の広がりを持つものを、知覚を通じて認識し、自己にとって有意義な情報として処理し、言語化してゆく。この言語使用という営みの中で言語は変化していかざるを得ない。このような人間の自然言語という融通無碍な、動的かつ自己組織的な仕組みを可能にしている一つの要因が、ここで述べたプロトタイプにもとづくカテゴリー化という人間の認知プロセスなのである。英語の可算名詞／不可算名詞というカテゴリー構造はその一例である。

注：

- 1 言語学では、母語話者により容認不可能と判断される表現にはアスタリスクマーク（*）を付けるという約束がある
- 2 レタス丸々1個という数量が問題になるような文脈では、*A customer buys six oranges at 8p each, a lettuce at 22p.* (BNC) というように、可算名詞として *lettuce* を使用することができる。同じように、普通は不可算名詞として使うが、場合によっては可算名詞として使われる例に *coffee* がある。お店でコーヒーをふたつ注文したいとき、*Two coffees, please.* と言える。
- 3 ここでいう「百科事典的知識」とは某出版社の△△世界大百科事典という具体的な書物に書かれている内容ではなく、慣習的・文化的に確立された世界に関する豊かな知識のことで、ある物事について心に思い浮かべる知識の総体を指す。
- 4 カテゴリー化にとって重要なのは2つの異なるカテゴリー間の差異（境界線）ではなく、中心的プロトタイプとどれほど似ているかが重要な決め手になる、と前に述べた。例えば、両端が片方ずつ青と赤で徐々に真ん中で紫色になっているような、ぼかし色の一本のリボンを想像してみたい。ここで、色を表現する言語的手段は「赤」と「青」の2つの色彩名称しかないこととし、「紫色」という表現はできないとする。すると、どこまでを「青」と言いどこからが「赤」になるのだろうか。「赤」と「青」しか語彙表現がないなら、どこかで区切らねばならず、かなり無理矢理に区切ることになる。この無理矢理さ感が「恣意性」といえる。
- 5 言語化することにより情報化される意味内容と、背景に隠されてしまう意味内容があるという現象は、たとえば、アンケートの職業欄の選択肢などで、仕方がなく「無職」を選んでも実は「主夫」なんだけれども、という場合の腑に落ちなさを経験したことのある人には実感として納得してもらえるかもしれない。
- 6 *noodles* もたいてい複数形で現れるがこれも麺一本を言及する状況は少ないということであって、まったく言えないという訳ではない。たとえば、*So he left a whole noodle, instead of a half.* *Charlotte's Web*. p.75 (下線：筆者)。

主要参考文献：

- 宇都宮裕章 2001 『数えることば—数えることをめぐる認識と日本語—』日本図書刊行会
尼ヶ崎彬 1995 『ことばと身体』勁草書房
松本曜 2003 『認知意味論』（シリーズ認知言語学入門 第3巻）大修館書店
David, Lee. 2001. *Cognitive Linguistics: an introduction*. Oxford University Press.
Taylor, John R. 2003. *Linguistic Categorization*. 3rd ed. Oxford University Press.

辞書、文法書など：

- British National Corpus [BNC]
Cambridge Grammar of English [CGE] (2006)
Longman Dictionary of Contemporary English (Updated edition) [LDOCE] (2005)